

トートロジーにおける等質化概念の混乱とその解消

—意味の共有をめぐる幻想—

酒井 智宏

キーワード: トートロジー 等質化 意味の共有 言語記号の恣意性

要旨

藤田 (1988) および坂原 (1992, 2002) に始まる等質化 (あるいは同質化) によるトートロジー分析はトートロジー研究の標準理論とさえ言えるまでになっている。この論文では、こうした研究で用いられている等質化概念が混乱に陥っていることを指摘し、その混乱が意味の共有という幻想に根ざしていることを論じる。等質化に基づく理論では、「PであるXはXでない」と「PであってもXはXだ」が対立する場面において、「PであるX」(p) がXであると仮定しても、Xでないと仮定しても、矛盾が生じる。この見かけ上のパラドックスは、Xの意味を固定した上で「pはXなのか否か」と問うことから生じる。実際には、この対立は「Xの意味をpを含むようなものとするべきか否か」という言語的な対立であり、pの所属をめぐる事実的な対立ではない。そのように解釈すればどこにも不整合はなくなる。逆に、そのように解釈しない限り、不整合が生じる。「猫」のような基本語でさえ、話者の間でその意味が常に共有されていると考えるのは、幻想である。そしてこれこそが「言語記号の恣意性」が真に意味していることにほかならない¹。

1. トートロジーにおける等質化をめぐる問い

トートロジー研究において等質化 (homogénéisation) という概念をはじめて導入したのは藤田 (1988) である²。

(1) (殺人の起きた家には住めないという相手に対して)

Une maison, c'est une maison. (「家は家だ。」)³

藤田によると、(1)が発話される文脈では、家が「p-殺人の起きた家」と「p'-殺人の起きていない家」とに分割されている。そうした分割を行う人物を ILS、トートロジーの発話者を JE とおくと、「X ÊTRE X の先行文脈において ILS が異質化した (p, p') は X ÊTRE X を発話する JE によって等質的に扱われる」(藤田 1988: 17)。(2)も同様で、(2B)のトートロジーは(2A)

¹ この論文は日本フランス語フランス文学会 2010 年度秋季大会 (2010 年 10 月 16 日、南山大学) における口頭発表に基づいている。

² 本論文で言うトートロジーとは X ÊTRE X (「X は X だ」という形式を持つ自然言語の文のことであり、論理学における恒真命題 (= 世界の状況とは無関係に常に真となる命題) のことではない。

³ 以下ではフランス語の例文に拙訳を付ける。

が分割した「 p = ねずみを捕まえない猫」「 p' = ねずみを捕まえる猫」を等質化する働きを持つ。

(2) A: Un chat n'est pas un chat s'il ne chasse pas de souris.

(「ねずみを捕らない猫は猫ではない。」)

B: Un chat est un chat (même s'il ne chasse pas de souris).

(「(ねずみを捕らなくても) 猫は猫だ。」)

等質化に基づく藤田 (1988) のトートロジー分析は坂原 (1992, 2002)、Sakahara (2008) に引き継がれ、現在ではトートロジー研究の標準理論と言えるまでになっている⁴。

この論文の目的は、等質化に基づくトートロジー分析がたった一つの問いをきっかけに内的不整合を露呈することを論じ、その内的不整合の解消のためには、「意味」概念の組み替えが必要であることを示すことである。その「たった一つの問い」とは、「先行文脈における p は X なのか?」というものである。この問いは、(1)に即して言えば「殺人の起きた家は家なのか?」となり、(2)に即して言えば「ねずみを捕らない猫は猫なのか?」となる。

殺人の起きた家が家であると仮定しよう。このとき、(1)のトートロジー *Une maison est une maison* (「家は家だ」) は家のカテゴリー内部の成員を等質化することになる。以下ではこれを「内部等質化」と呼ぶ。次に、殺人の起きた家が家でないとして仮定しよう。このとき、(1)のトートロジーは家のカテゴリーの外に出してしまったものを家のカテゴリーに連れ戻すことになる。以下ではこれを「外部等質化」と呼ぶ。内部等質化と外部等質化はそれぞれ坂原 (2002) の次の発言に対応している。

『 X は X だ』はカテゴリ X 内部のメンバ間の同質性を焦点化する」 (坂原 2002: 109)

「トートロジーは、マージナルなメンバをカテゴリに引き戻す働きがある」 (ibid.: 122)

坂原は「先行文脈における p は X なのか?」という上の問いに対して、「 p が X である場合と X でない場合がある」、すなわち「内部等質化の場合と外部等質化の場合がある」と答えていることになる。この答えで本当に大丈夫なのだろうか。この一見マイナーな問いが、実のところ、言語表現の意味のありかをめぐる大きな問題に発展するのである。

2. 藤田 (1988, 1990, 1992) の混乱

「先行文脈における p は X なのか?」という問いに対して、藤田 (1988) はどう答えるだろうか。藤田 (1988: 17) は「ILS は r [: 殺人の有無という基準] によって X [= maison]の内部に異質な(p, p')を構築する。」と言う一方で、「(Pour ILS) “une maison, s'il y a eu un crime, ce n'est plus une maison. Ce n'est plus habitable.”」(「ILS にとっては) 家は、犯罪が起きたら、もはや家

⁴ 藤田 (1988, 1990, 1992) が「等質化」という用語を用いているのに対して、坂原 (1992, 2002) は「同質化」という用語を用いているが、両者は同じ概念であると考えてよい。

ではない。もはや住むことはできない。」)とも言う⁵。藤田のこれらの発言は「p が X である場合とそうでない場合がある」というよりむしろ「p は X でありかつ X でない」と言っているように読める。言うまでもなく、これは矛盾である。これとは異なる脈絡の発言ではあるが、藤田の次の発言も p のステータスをめぐる混乱を物語っている。

「[un chat qui n'attrape pas de souris (「ねずみを捕らない猫」)は]『他の条件はどうでも、猫の最低条件を満たしていない猫』であり、X [= chat (「猫」)]の周縁的 occurrence である。」(藤田 1992: 99)

猫の最低条件を満たしていないものは定義上猫ではない。したがって、それが猫の周縁的 occurrence であることはありえない。藤田の発言は矛盾していると言うほかない。先行文脈における p は X なのか? この問いをめぐって藤田は混乱している。

3. 坂原 (1992, 2002, 2008) の混乱

次に坂原の見解を見てみる。少し長くなるが、坂原 (2002) からの引用を読み解いてみよう。

トートロジーは、「すべての X が X であるわけではない」という考えを否定するために使われることが多い。[...]「すべての X が X であるわけではない」は、一見すると、矛盾文であるが、Grice の協調の原則から、通常、われわれは矛盾した発話を避ける。この文が、矛盾していないためには、2つの X は、X に対する2つの見方、2つのカテゴリ化を表していなければならない。とすると、それ自体無意味なトートロジーも、X に対する2つのカテゴリ化があるという考えを否定するものとして、有意味になれる。すなわち、「すべての X が X だ」という、しごく当たり前のことが発言するに値するためには、「すべての X が X であるとは限らない」いう[sic]一見矛盾した見方、X が X でなくなる可能性の存在が前提になる。こうして、[...]トートロジーはそれ自体が意味を持つ必要がなくなり、X に対する複数のカテゴリ化が存在するコンテキストで、そのカテゴリ化の否定として意味を持つ。(坂原 2002: 108-109)

ここから読み取れることは、坂原は、トートロジー「(すべての) X は X だ」が意味を持つのは矛盾文「すべての X が X であるわけではない」の否定としてである、と考えているということである。矛盾文により p がいったん X からはじき出され、トートロジーはその否定として意味を持つのである。この見解は Sakahara (2008) においても変わっていない。

(3) A: Cats that don't catch mice are not cats.

⁵ 強調は引用者による。

B: Cats are cats.

"[(3B)] is a genuine tautology linguistically as well as logically. The reason why a logically genuine tautology is still meaningful is that it is taken as the negation of [(3A)][...]. Thus, a tautology does not have to be meaningful in itself." (Sakahara 2008: 214)

この考え方では、トートロジーが有意味であるためには、矛盾文によって p が X からはじき出されることが前提となる。したがって、坂原は「先行文脈における p は X なのか?」という問いに「p は X ではない」と答えていることになる。

この坂原の見解は「トートロジーは (それが有意味である以上) 外部等質化のみを表す」と読むことができる。これは先に挙げた坂原自身の発言「『X は X だ』はカテゴリ X 内部のメンバー間の同質性を焦点化する」(坂原 2002: 109) と矛盾する。この時点ですでに、坂原の分析がどこかに不整合を抱えていることが窺えるが、この点には当面目をつむることにしよう。ところが、坂原はさらに奇妙なことを言い出す。

(4) Only cats that catch mice are cats.

[(3A)と等価な(4)に関して]

"[(4)] says that mouse-catcher cats are cats but that cats that are not mouse-catchers are not. But what [(4)] really means is that mouse-catcher cats are better examples of the cat species than non-mouse-catchers. The speaker of [(4)] will surely admit that both of them are cats in the ordinary sense of the word *cat*." (Sakahara 2008 : 211-212)

ここで坂原は「p は X でなく、かつ X である」と矛盾したことを言っているように見える。そして、その矛盾を気にかける様子もない。これは第2節で見た藤田の混乱と類似している。

この矛盾を解消するにはどうすればよいだろうか。坂原の言う「p は X である」と「p は X でない」の意味するところを考えてみる。引用の最後の文から分かるとおり、「p は X である」とは「p は通常の意味での X である」ということである。「p は X でない」をこれと矛盾しないように解釈するためには、「p は通常でない意味での X ではない」と解釈する必要がある。では、「通常の意味での X」あるいは「通常でない意味での X」とは何か。坂原によると、「通常でない意味での X」とは「真の X」ということである。これは坂原 (2002: 112) が上の(2A)を(5)のようにパラフレーズしていることによって確かめられる⁶。

(5) $(\forall x)(x \in X)(\neg Px \rightarrow \neg X_0x)$

(「猫であるどんな x についても、x がねずみを捕まえないければ、x は真の猫では

⁶ 坂原の表記では X_0 は「真の X」を表す。以下の議論ではこれを X' と表記する。

ない。）」)

すなわち、ねずみを捕まえない猫は、通常の意味での猫ではあるが、真の猫 (= 通常でない意味での猫) ではないということである。

おそらく、藤田や坂原が「トートロジーの先行文脈における p は X なのか」という問いに対して平然と「p は X であり、かつ X でない」という矛盾した解を与えているように見えるのは、「p は真の (= 通常でない意味での) X ではないが通常の意味では X である」と考えていたためだと思われる。X という語に単なる X を指す場合と真の X を指す場合があると考えれば、確かに藤田や坂原の言う「p は X であり、かつ X でない」は矛盾ではなくなる⁷。また、そのように考えることで、内部等質化と外部等質化の差異も見かけ上のものに過ぎなくなる可能性がある。この点を確かめるために、通常の意味での単なる X を X と書き、真の X を X' と書こう。トートロジーにおける等質化とは、X' からはじき出され、単なる X になってしまった p を X' に連れ戻すことであると考えられる⁸。X の観点から見ると、これは内部等質化である。なぜなら、p は等質化以前も等質化以後も X の内部にとどまっているからである。他方、X' の観点から見ると、これは外部等質化である。なぜなら、p は X' の外から X' の内部に連れ戻されているからである。結局、矛盾文 X n'est pas X とトートロジー X ÊTRE X は、X の意味自体は共有した上で、X のプロトタイプのあり方をめぐって対立していることになる。矛盾文は X のプロトタイプと非プロトタイプを差異化し、トートロジーはそれらを等質化する。

一見したところ、これで「先行文脈における p は X なのか」という問いに矛盾なく答えられたように思われる。しかし、これは錯覚である。「トートロジーの先行文脈で、p は X であるが、X' ではない」とする坂原の説は、上の(2A)が次の(6)と同義であるという説とセットである。

(6) Un chat n'est pas un vrai chat s'il ne chasse pas de souris.

(「ねずみを捕らない猫は真の猫ではない。」)

坂原の説が正しければ、「ねずみを捕らない猫は猫ではない」は字義通りに解釈されてはならず、「ねずみを捕らない猫は真の猫ではない」と解釈されなければならない。さもないと、「p は X であり、かつ X でない」という矛盾が再来してしまう。上で見たように、坂原の説によると、トートロジーの先行文脈で実際に言われているのは「p は X であり、かつ X' でない」ということであるから、「X でない」はあくまでも「X' (= 真の X) でない」と解釈される必要がある。ところが、次節で見るように、(2A)が(6)と同義であるとする説は3つの困難を引き起こす。

二. 内部等質化という考え方の問題点

⁷ 実際、坂原 (1992: 63) は、「X という表現は、第一に、カテゴリ X 全体、第二に、その部分 X_n の両方を指せるようになる。すなわち、X という表現は、見えにくい形であるが、多義語になっているのである」と述べている。

⁸ この点については 4.3 節で改めて問題にする。

4. 1 主張の強さの問題

(2A)と(6)が同義でないことは(7)のやり取りによって示される (Sakai 2007)。

(7) A1 : Un chat qui n'attrape pas de souris n'est pas un chat.

(「ねずみを捕らない猫は猫ではない。」)

B : Mais alors que sont au juste les chats qui n'attrapent pas de souris ?

(じゃあねずみを捕らない猫ってのはいったい何なんだ。)

A2 : Eh ben... tu vois, d'accord, c'est des chats si tu veux, mais pas des vrais,
pas ce que moi je qualifierai de vrais, mais enfin...

(そうだなあ…うん、分かったよ。猫と呼びたきゃそう呼んでもいい。

だが、私に言わせれば真の猫じゃない。まあつまり…)

(藤田 1988: 21-22、表記を変更、強調と和訳は引用者による。)

ここで、d'accordおよび si tu veux という譲歩表現が示すように、A1 では「ねずみを捕らない猫は猫ではない」と言われていたのに対して、A2 では、相手の発言に譲歩する形で、「ねずみを捕らない猫は真の猫ではない」と主張が弱められている。このような譲歩が可能であるためには、主張の強さが「A1 > A2」でなければならない。ゆえに、(2A)と(6)は同義ではない。

4. 2 矛盾文の叙述名詞句に対する自由拡充の問題

(2A)と(6)を同義と見なす分析の第二の問題点は、いわゆる自由拡充 (free enrichment) に関するものである。次の(8a)を字義通りに解釈すると「すべての画家が眠っている」となるが、実際には(8b)のイタリックの部分に対応する限定が加えられて、「この会合に出席しているすべての画家が眠っている」などと解釈される。

(8) a. Every painter is sleeping.

b. Every painter *attending this meeting* is sleeping.

ここで二つのことに注意する必要がある。第一に、イタリックの部分は文法的必要に迫られて補われたわけではない。実際、馬鹿げているとはいえ、(8a)を何の限定もなく「すべての画家が眠っている」(すなわち存在するすべての画家が眠っている) と解釈することに文法的な問題は何かもない⁹。第二に、限定のない「すべての画家が眠っている」と限定付きの「この会合に出席しているすべての画家が眠っている」では真理条件が異なる。後者が真だからと言って前者

⁹ (8b)のイタリックの部分が文法的要請で補われるとする立場もある。この考え方によると、限定のない「すべての画家が眠っている」も、そのままでは解釈不能であり、実は「世界中のすべての画家が眠っている」という限定を受けていることになる。この立場では(8b)のイタリックの部分の補う操作は自由拡充ではなく、飽和 (saturation) と呼ばれる操作の一種となる。この問題についてはたとえば Recanati (2004) の第7章を参照。

が真だとは到底言えず、むしろ前者はたいていの状況で偽だろう。このように、「文法によって制御されていないが、真理条件に影響を及ぼすような解釈の補正」を自由拡充と呼ぶ。

自由拡充に関して、西山 & 峯島 (2006: 35) は「自由拡充は叙述名詞句の解釈において阻止される」という制約を提案している。この制約の根拠となるのは、(9a)がいかなる文脈でも(9b)のように解釈されることはないという事実である。

- (9) a. No one over there is a painter.
 b. # No one over there is a painter *drinking beer*.

この西山 & 峯島 (2006) の制約が正しければ、叙述名詞句である(2A)の属詞に *vrai* という限定を付けて(6)のように解釈することは許されないことになる。

4. 3 トートロジーの叙述名詞句に対する自由拡充の問題

仮に西山&峯島 (2006) の制約を認めないとしても、第三の問題が浮上する。叙述名詞句への自由拡充を認めると、(2A)が(6)の解釈を持つとは言えるようになるが、今度は(2B)のトートロジーが(10)の解釈を持たないという事実が説明できなくなるのである。

- (10) # Un chat est un vrai chat (même s'il ne chasse pas de souris).
 (「ねずみを捕らなくても、猫は真の猫だ。」)

坂原 (2002: 114) は(2B)を譲歩節まで含めて(11)のようにパラフレーズしている。

- (11) $(\exists x)(x \in X)(\neg Px \ \& \ X_0x)$
 (「猫の中に、ねずみを捕まえず、かつ真の猫であるものが存在する。」)

しかし、このパラフレーズはおかしい。このパラフレーズは、坂原 (2002) の 10 年前に刊行された坂原 (1992) の発言と真っ向から対立する。

「[...] Toutes les femmes sont des femmes. [「すべての女性は女性だ。」] という解釈のトートロジー Une femme est une femme. [「女性は女性だ。」] の属詞に *vrai* [「真の」] を付けることはできない。なぜなら、これは、まさに *femme* [「女性」] には *vraie femme* [「真の女性」] も *pseudo-femme* [「偽の女性」] もなく、みな等しく *femme* であると主張しているからである。」 (坂原 1992: 70)

(11)の論理式はまさにトートロジー $X \text{ \acute{E}TRE } X$ の属詞 X に *vrai* を付けた解釈に対応している¹⁰。事実としては、坂原 (1992) の言うようにトートロジーの属詞には *vrai* を付けることができないのであるから、(11) のパラフレーズは不適切である。しかし、坂原 (1992, 2002) の理論の中に、トートロジーの属詞への自由拡充を阻止するものは何もない。

第3節で、トートロジーにおける等質化とは、 X' からはじき出され、単なる X になってしまった p を X' に連れ戻すことであると考えれば、内部等質化と外部等質化の区別を事実上無化することができる。しかし、トートロジーの属詞に *vrai* を付けることができないという事実は、トートロジーの表す等質化が、 p を単なる X から X' に引き戻すことには対応しないことを物語っている。したがって、第3節で示唆されたような、内部等質化と外部等質化の区別を無化しようとする試みは失敗に終わる。

以上から、トートロジーの先行文脈において p が X の内部にとどまっている (= p は X' ではないが、 X ではある) と考えることはできない。したがって、「先行文脈における p は X なのか?」という問いに対しては「 p は X ではない」と答えるしかない。すなわち、トートロジーは X の外に出てしまった p を X に引き戻す、すなわち、外部等質化の機能を持つのである。ところが、次節で見ると、この外部等質化という考え方も二つの困難を引き起こす。

5. 外部等質化という考え方の問題点

5. 1 等質化トートロジーの有意性条件

トートロジーが外部等質化を表すという考え方の第一の問題は、トートロジーの発話がどのような条件で有意となるか、という点に関わるものである。第3節で見たように、坂原 (2002) はトートロジーが有意であるためには、 X がいったん X の外にはじき出される必要があると考えている。「『すべての X が X だ』という、しごく当たり前のことが発言するに値するためには、『すべての X が X であるとは限らない』いう[sic]一見矛盾した見方、 X が X でなくなる可能性の存在が前提になる。」(坂原 2002: 108) 前節の議論から、ここで言われている「 X が X でなくなる可能性」は、「 X が真の X でなくなる可能性」と解釈されてはならず、あくまでも字義通りに解釈されなければならない。ところが、坂原の予測に反し、 p が X の外に出ていなくてもトートロジーは使用可能である。

¹⁰ 正確には、対応していない。というのは、トートロジー $X \text{ \acute{E}TRE } X$ が伝達するのは、坂原 (1992) からの引用にあるとおり、「*femme* には *vraie femme* も *pseudo-femme* もなく、みな等しく *femme* である」という全称命題であるが、(11)は全称命題ではなく存在命題になっているからである。このミスマッチは(11)にどこか怪しげなところがあることを物語っている。実際、(11)を全称命題に書き換えると、「すべての猫は (= ねずみを捕る猫も捕らない猫も) 真の猫だ」という命題になると思われる。しかし、これは明らかにおかしい。すべての猫が真の猫であるならば、「真の猫」という概念は消滅してしまう。これは嘘という概念のないところには真実という概念も成立しないと同様である。(i) 我々の言語活動において「真の X 」という概念が確かに存在すること、(ii) 坂原の分析が「真の X 」の存在に依拠したものであること、の二点を踏まえると、トートロジーの伝達する命題は「すべての猫は真の猫だ」といった命題であってはならない。この命題を(無意識のうち?) 避けた結果が(11)の存在命題であると思われる。ところが、(11)では今度はトートロジーの全称性が行方不明になってしまう。結局、全称命題と *vrai* は相容れないということである。この点で、トートロジーに *vrai X* という概念は似つかわしくないとする坂原 (1992) の見解は健全なものであった。坂原 (2002) はこの健全な見解を自ら棄めてしまっている。

(12) A: Une guerre locale, ce n'est presque pas une guerre.

「局地戦はほとんど戦争とは言えない。」

B: Une guerre est une guerre, locale ou pas.

「局地戦だろうと何だろうと、戦争は戦争だ。」

(坂原 1992: 64、強調は引用者による)

下線部が示す通り、(12A)ではp(= 局地戦)は依然としてX(戦争)のカテゴリーに属している。それにもかかわらず、(12A)に反論するために(12B)のようなトートロジーを使用することができる。これはトートロジーが有意味であるためにはXがXでなくなる必要があるとする坂原の主張が誤りであることを示している。

ここで坂原は言うかもしれない。「もっとしっかり読め。私は、XがXでなくなるのが前提だとは言っていない。XがXでなくなる可能性が前提だと言ってるんだ。」¹¹ そう言われてみると、確かに上の引用箇所は「XがXでなくなるのが前提になる」ではなく「XがXでなくなる可能性の存在が前提になる」となっている。そして、(12A)は局地戦を戦争のカテゴリーから追放してはいないが、追放する構えを見せているとは言える。Xが実際にXでなくなる必要はなく、Xでなくなる可能性が示唆されていればよい。そう考えれば、(12)は確かに外部等質化への反例とはならない。

しかし、この考え方でもうまくいかない例が存在する。Cadiot & Nemo (1997) は(13a-14a)のようなトートロジーの例を挙げ、これらにそれぞれ(13b-14b)のようなパラフレーズを与えている。

(13) a. Une voiture est une voiture. (「車は車だ」)

b. Les voitures se valent. (「車はどれも似たり寄ったりだ。」)

(14) a. Un steak est un steak. (「ステーキはステーキだ。」)

b. Un steak en vaut un autre. (「ステーキなんてどれを選んでも一緒だ。」)

(13a-14a)はそれぞれ(13a-b)と対立する発話であり、カテゴリーXの内的差異への無関心を表明している。

(15) a. Il y a voiture et voiture. (「車にもいろいろある。」)

b. Il y a steak et steak. (「ステーキにもいろいろある。」)

坂原 (2002: 116)も(16)のような発話が「メンバ間の差異に対する全面的な無関心を表すトート

¹¹ 坂原が実際にそのような反論を行ったわけではない。

ロジ」であると述べている。

- (16) a. ウオッカはウオッカ。どれも同じ。
 b. タバコはタバコ。煙が出さえすればよい。

これらの発話は X の内的差異への無関心を表明しているだけであり、先行文脈において車、ステーキ、ウオッカの一部をそれぞれのカテゴリーから追放することが画策されている必要はまったくない。したがって、「先行文脈において p は X なのか」という問いに対する答えは「p は X である場合がある」でなければならない。これは「p は X の外になければならない」という外部等質化の考え方と矛盾する。

上で見たように、坂原 (2002) は、トートロジーが有意味であるためには先行文脈で p が X でなくなる可能性が存在する必要があると述べているが、坂原自身が挙げる(16)のような例によって、この考え方は反証される。同じ論文の中でこのような不整合が生じたのはなぜか。この観点から坂原の発言を見直すと、巧妙なすり替えが含まれていたことに気づく。第3節の坂原 (2002: 108) からの引用をもう一度見てみる。坂原は一方で「トートロジーは、『すべての X が X であるわけではない』という考えを否定するために使われることが多い」と述べながら、他方で『『すべての X が X だ』という、しごく当たり前のことが発言するに値するためには、『すべての X が X であるとは限らない』いう[sic] 見矛盾した見方、X が X でなくなる可能性の存在が前提になる」(強調は引用者による) と述べている。ここで坂原は「X が X でなくなる可能性の存在」がトートロジーが有意味であるための必要条件ではないことを認めているが、その直後にさりげなくそれを必要条件に昇格させている。この偽装工作によってトートロジーの有意味化メカニズムを確保した上で、そのメカニズムとは無縁であるはずの「差異に関する全般的な無関心」の例を挙げているのである。坂原の議論を読んで、こうした例も同じ有意味化メカニズムで説明がつくと思った読者は、坂原の偽装工作にまんまと騙されている。実際には、坂原は p が X の内部にとどまっている場合のトートロジーの有意味化メカニズムを何も説明していない。

5. 2 X ÊTRE X の命題内容

トートロジーが外部等質化を表すという考え方の第二の問題は、X ÊTRE X (「X は X だ」) が表す命題の内容に関わる論理的問題である。トートロジーが外部等質化を表すとすると、トートロジーは X でなくなった p をカテゴリー X に引き戻し、p と他の X を等質化することになる。しかし、X ÊTRE X という形式の文が X でないはずの p に言及するというのは奇妙である。坂原によると、この文は「すべての X は X だ」を意味する。だとすると、どうがんばっても、X でない p を X に引き戻すことなどできはしない。いくら「すべての人間は人間だ」と言っても、人間でないもの、たとえば猫や机や石を人間にすることはできないのと同じことである。この文が X についてのみ語る文であり限り、この文が表す主張は X の外には届かない。

「すべてのXはXだ」によってXでないはずのpをXにすることができるという坂原の分析は、トートロジーにそれを可能にする「魔術的な力」が備わっていることを前提とするものである。その魔術的な力の正体を明らかにしない限り、等質化のメカニズムについて何も説明していないことになる。

第1節で提起された「トートロジーの先行文脈におけるpはXなのか?」という問いに対して、第4節の議論からは「pはXであってはならない」(すなわちトートロジーは外部等質化を表す)という結論が導かれ、第5節の議論からは「pはXの外に出ている必要がないばかりか、論理的にはXの外に出ている必要はない」(すなわちトートロジーは内部等質化を表す)という結論が導かれる。かくして、pがXであると考えても、Xでないと考えても、説明のつかない事実が残る。いわば、排中律 $X(p) \vee \neg X(p) (=p \text{ は } X \text{ であるか } X \text{ でないか})$ が成り立たないのである¹²。このパラドックスめいた事態をどう回避すればよいだろうか。

6. 意味の共有をめぐる幻想とトートロジーの機能

6. 1 意味の共有をめぐる幻想

藤田と坂原の考えでは、矛盾文 $X \text{ n'est pas } X$ とトートロジー $X \text{ \u00c9} \text{t} \text{r} \text{e } X$ は、Xの意味自体は共有した上で、Xのプロトタイプのあり方をめぐって対立している。矛盾文はXのプロトタイプと非プロトタイプ(=p)を差異化し、トートロジーはそれらを等質化する。しかし、この立場に立つ限り、「トートロジーの先行文脈におけるpはXなのか?」という問いに答えようとした瞬間にパラドックスが生じる。

このことは、そもそもこれが発せられてはならない問いであることを示している。パラドックスを回避するには、この問いが問いとして成立する以前の地平に立ち戻るしかない。では、具体的にどこまで立ち戻ればよいのか。それはXの意味が未定である段階である。Xの意味が

¹² 大阪大学の井元秀剛氏(個人談話、2010年10月18日)より、メンタル・スペース理論におけるアクセス原則を用いればパラドックスを回避できるのではないかとコメントをいただいた。「Aのメンタルスペースの中ではpはXの成員ではないが、Bのメンタルスペースの中でpとアイデンティティコネクターで結ばれたp1がXの成員であるなら、p1のカテゴリーXを用いて十分pを指すことができる。[ゆえに、先行研究の枠内でもパラドックスは成立しない。]」しかしながら、私にはこのコメントの趣旨がよく理解できない。ここで問題にしているのは「pはXか?」ということであって、pがいかなる記述で指されるかではない。pが何を指すかがAとBとで一致しているならば、AとBがpを何と呼ぼうと、この問いは成立する。また、「pはXか?」という問いが成立するためには、Xの意味がAとBとの間で共有されていなければならない。「2011は偶数か」という問いに対して、Aは「2011は偶数ではない」と答える。Bは「2011は偶数だ」と答える。それぞれに理由を尋ねると、Aは「2で割り切れないからだ」と答える。同じくBも「2で割り切れないからだ」と答える。このとき、AとBの間ではそもそも「偶数」の意味が共有されておらず、「2011は偶数か」という問い自体がまともに成立していないと見るべきである。Aの立場から見れば、Bは偶数の意味を誤解しており、文字どおり話にならないのである(Bの立場から見れば、逆にAについて同じことが言えるだろう)。ここで、Aの言う「偶数」とBの言う「偶数」を「アイデンティティコネクター」なるもので結合したければ結合してもよい。しかし、そんなことをしても事情は変わらない。相変わらずAとBが偶数について語り合うことは不可能である。ゆえに、「pはXか?」という問いが成立するとき、Xの意味がAとBの間で食い違っていないはずはない。井元のコメントが「AとBの間でXの意味が食い違っていない」という趣旨であるならば、このコメントは誤りであると言わざるを得ない。逆に、Xの意味が共有されているならば(そしてpの指示対象が共有されているならば)、「pはXか?」という問いが成立し、本文で見たようなパラドックスが生じる。したがって、トートロジーが発話される時点では、Xの意味が共有されていない。これこそが本論文で主張したいことにほかならない。

定まっている限り、「 p は X か?」という問いは意味をなし、原理上それに答えることができる。たとえば、「偶数」が「2で割り切れる数」という意味に定まっているならば、「2011は偶数か?」という問いを立てることができ、この問いに取り組むことができる。そして、原理上は「2011は偶数である」か「2011は偶数でない」のいずれかの答えを出すことができる。これに対して、「偶数」の定義が定まっていないときには、「2011は偶数か?」という問いに取り組むことはできない。何を基準にして判断を行えばよいか不明だからである¹³。この問いに対して、 A は「偶数だ」と言う。 B は「偶数でない」と言う。そして二人とも、「なぜなら2で割り切れないからだ」と言う。このとき、 A は「2011は2で割り切れない数か」という問いに取り組み、 B は「2011は2で割り切れる数か」という問いに取り組んでいたことになる。すなわち、二人は同じ問いに取り組んでいないのである。かくして、 X の意味が定まっているならば、「 p は X か?」という問いに取り組むことができ、 X の意味が定まっていないならば、「 p は X か?」という問いに取り組むことはできない。ここで、トートロジーが発話される段階では、「 p は X か?」という問いに取り組むことができなかつたことを思い起こそう。これはまさに、トートロジーが発話される時点では、 X の意味が未定であることを物語っている。

矛盾文(2A)は「 p は X でない」と言っているように見え、それに反論するトートロジー(2B)は「 p は X だ」と言っているように見える。ここから、矛盾文とトートロジーの対立は p の X への帰属をめぐる対立であるという印象が生まれる。では、トートロジーが発話される時点で、 p は X であるとされているのか、それとも X でないとしてされているのか。答えはどちらかであるはずである。しかし、この問いを発した瞬間、パラドックスに巻き込まれる。「 p は真の X ではないが、 X ではある」という折衷的な回答を与えても、パラドックスは回避できない。パラドックスを回避するためには、矛盾文が表す命題「 p は X ではない」およびトートロジーが表す命題「 p は X だ」を事実命題として解釈してはならない。矛盾文とトートロジーの対立は p の X への帰属をめぐる対立ではないのである。矛盾文とトートロジーは、事実命題を表しているように見えながら、実は X の意味に関する命題を表している。矛盾文が表す「 p は X でない」は「事実を調べた結果、 p は X でないと判断される」といったことを述べているのではなく、「 p が X に含まれないように X を定義する」と宣言している。トートロジーが表す「 p は X だ」は「事実を調べた結果、 p は X であると判断される」といったことを述べているのではなく、「 p が X に含まれるように X を定義する」と宣言している。矛盾文もトートロジーも、その場で X の意味を宣言しているのである。したがって、矛盾文とトートロジーは X の意味を共有しておらず、「 p は X なのか?」という共通の問いに取り組んでいるわけではない。共通の問いに取り組んでいると考える限り、パラドックスが不可避免的に生じてくる。逆に、 X の意味を共有していないと考えれば、パラドックスは生じない。矛盾文とトートロジーが発話される時点で、 X の意味は未定なのである。maison(「家」)やchat(「猫」)のような基本語でさえ、母語話者の間でその意味が全面的に共有されていると考えるのは、幻想に過ぎない。

¹³ このことは「2011はヘノヘノモヘジか?」といった問いを想像してみれば分かる。これは、「ヘノヘノモヘジ」なるものの意味が不明である以上、取り組みようのない問いである。

藤田 (1988, 1990, 1992) と坂原 (1992, 2002, 2008) は、矛盾文とトートロジーが概念 X の捉え方をめぐって対立するものであることは見抜いていたが、X という語の意味が何らかの形で共有されているというドグマから抜け出すことができなかった。これは彼らの分析に「プロトタイプ」という用語が頻出するという事実によって裏付けられる。矛盾文(2A)は猫のプロトタイプを提案し、トートロジー(2B)はそれを拒否する。(2A)にとって、ねずみを捕らない猫は、普通の意味での猫ではあるが、真の猫 (= 猫のプロトタイプ) ではない。(2B)は猫のカテゴリ内部で行われるそうした差別を拒否する。この考え方では、(2A)にとっても、(2B)にとっても、「猫」という語は「普通の意味での猫」(猫の非プロトタイプ) と「真の猫」(猫のプロトタイプ) を合わせたものを指す。ただ、(2A)は本来ならば「真の猫ではない」と言うべきところを「猫ではない」と言ってしまうだけである。(2A)は本気で「猫ではない」と言っているわけではなく、当該の猫が普通の意味での猫であることは認めるはずであり、ただ、その猫が猫のプロトタイプであることを否定しているだけである。ここでは、「猫」が「真の猫」の同義表現として使われている¹⁴。これが藤田と坂原の描いたシナリオである。このシナリオが機能するためには、どうしてもプロトタイプ(「真の X」という概念)を持ち出すことが必要となる。こうして、彼らの分析においてはプロトタイプという用語がキーワードとなり、トートロジーの認知意味論的分析と称されることになる。しかし、これまで論じてきたように、この考え方はパラドックスに至る。実際には、(2A)は、猫のプロトタイプを定義しているのではなく、猫を定義しているのである。「猫のプロトタイプ」と「猫」は異なる概念である。「猫のプロトタイプ」とは「猫」の意味がすでに定まっている場合にのみ意味をなす概念である。したがって、トートロジー X ÊTRE X の分析に「X のプロトタイプ」を持ち出した時点で、藤田と坂原は、「X」の意味が共有されているという前提に立っていたことになる。さらに言えば、「猫」の概念は「普通の意味での猫」の概念とも異なる。「普通の意味での猫(猫の非プロトタイプ)」は、「猫」の意味が与えられている場合にのみ意味をなす概念である。トートロジー X ÊTRE X の分析に「X の非プロトタイプ」を持ち出した時点で、藤田と坂原は、やはり「X」の意味が共有されているという前提に立っていたことになる。我々は「真の X」を定義する自由も持ち合わせているが、「X」を定義する自由も持ち合わせている。藤田と坂原の分析は後者の自由を取り込むことに失敗している¹⁵。

¹⁴ この同一視は坂原 (2002: 112, 強調は引用者による) の次の発言からも見て取れる。

「ある言語共同体で常識的に認められている基準では、a はネコである。しかし、ネコらしいネコであるための基準が、ネズミを捕ることだとすると、a はネコではない。」

字義通りには、第一の下線部と第二の下線部は整合していない。字義通りには「ネコらしいネコであるための基準が、ネズミを捕ることだとすると、a はネコらしいネコではない」としか言えないはずである。この引用箇所を整合的に理解するためには、「ネコらしいネコ = ネコ」という等式を想定するしかない。

¹⁵ 日本フランス語フランス文学会 2010 年度秋季大会における日頭発表 (2010 年 10 月 16 日、南山大学) の質疑応答時に、木内良行氏 (大阪大学) より、藤田と坂原が意味の共有をめぐるドグマに囚われていないことは、他の解釈の余地がないほどに自明であり、本論文の批判は誤読に基づく不当なものであるとの厳しいコメントをいただいた。木内の解釈では、藤田論文と坂原論文において、矛盾文とトートロジーが、「真の X」の意味はもちろん、「X」の意味も共有していないと考えられていることは明らかである。他方、同日の個人談話で、阿部宏氏 (東北大学) より、矛盾文(2A)はねずみを捕まえない猫が猫でないこと本気で言っているわけではなく、普通の意味で猫であることは当然認めているため、「猫」の意味が共有されていないとする本論文の議論は誤りであ

6. 2 トートロジーの発話に伴う事実

坂原 (2002) は $X \text{ ÊTRE } X$ が有意味である条件として X が X でなくなる可能性の存在を想定していたが、5.1 節で論じたように、実際にはこの条件は不要である。そこで、トートロジーが我々の言語活動の中で果たす役割は、 X が X でなくなる可能性とは独立に保証されなければならない。トートロジー $X \text{ ÊTRE } X$ の発話に伴う最低限の事実とは、語 X が適用されたものに再び語 X が適用されることである。以下で見るように、この事実からトートロジーの機能を導き出すことができる。

本論文ではトートロジーのすべての用法を論じる余裕がないので、次の二つの場合のみに注目したい。語 X の一度目の適用状況 $S1$ と二度目の適用状況 $S2$ に関して、(i) $S1$ と $S2$ とで X の適用対象の属性が異なる。(ii) $S1$ と $S2$ とで X の適用者が異なる。(i) の場合を 6.3 節で、(ii) の場合を 6.4 節で論じる。

6. 3 矛盾文と対立するトートロジー

6.1 節で述べたように、矛盾文は「 p が X に含まれないように X を定義する」と宣言し、それに反論するトートロジーは「 p が X に含まれるように X を定義する」と宣言する。これを(2A-B)

るとの批判をいただいた。阿部のコメントは、(本論文が解釈した限りでの) 藤田および坂原の分析と同様に、「 $X = \text{真の } X$ 」という等式を前提とするものであり、この考え方が不適切であることは本論文のこれまでの議論で示されている。木内のコメントに対しては次のように答えたい。仮に木内のコメントが正しく、藤田と坂原が意味の共有をめぐるドグマに囚われていないとしてみよう。このとき、説明のつかない事実が少なくとも二つ浮かび上がる。第一に、どうして藤田と坂原の分析においてプロトタイプという用語 (あるいは「真の X 」という概念) がキーワードとなるのかという問題である。 X 自体の意味が共有されていない場面でトートロジーが発話されるならば、 X のプロトタイプなど持ち出さなくてもトートロジーの機能を記述することができるはずである。したがって、もしも木内のコメントが正しければ、藤田と坂原はトートロジーの分析にとって本質的でない概念を本質的であるかのように誤って提示していることになる。第二に、藤田論文と坂原論文に関して、どうして上述の阿部のような理解をする人がいるのかという問題である。阿部はこれらの論文を読んでおり、その主張に賛意を表しているが、相変わらず意味の共有をめぐるドグマに囚われている。したがって、もしも木内のコメントが正しければ、藤田と坂原の書き方に問題があるか、阿部の理解に問題があるかのどちらかとなる。以上の二つの点から、木内のコメントは、仮にそれが正しいとすると、本論文のみならず、藤田、坂原、阿部に何らかの非を負わせるものとなる。この時点で、木内の解釈が自明のものでないことは自明である。現実的なのは、藤田と坂原の議論においてプロトタイプの概念が本質的な役割を演じており、かつ彼らの書き方に問題はなく、かつ阿部の理解が正しいという可能性であろう。これはすなわち、現実的に考えて、木内の解釈の方が誤っているということである。藤田と坂原は、トートロジーがカテゴリー X のプロトタイプに関わる現象であるという優れた洞察を提示しながら、意味の共有をめぐるドグマから抜け出すことができなかった。このドグマは木内が考えている以上に根深いのである。木内のコメントは、藤田論文と坂原論文で展開されるプロトタイプに関する豊かな洞察を誤読しているのみならず、意味に関するドグマの根深さをも見積もり損ねている。木内にとっては矛盾文とトートロジーが X の意味を共有していないことは自明であるのかもしれないが、木内にとって自明であることが他者にとっても自明であるとは限らない。「自明」という語の意味が常に共有されていると考えるのはまさしく幻想である。自らの読みを何の議論もなく自明なものとし、他者の読みを何の議論もなく誤読と断ずるのは、文献解釈のあり方として貧弱であると言うほかない。ある文献がどんなに自明なことを語っているように見えようとも、それが重要な文献である限り、おそらくいささかも自明なことを語ってはならず、それが新たな議論の出発点となるのである。自らの解釈を唯一のもののみなし、生まれるはずの議論の命脈を断ち切ってはならない。山口裕之 (2002) 『コンディヤックの思想: 哲学と科学のはざままで』(勁草書房): p. iii に引用されているコンディヤック (*Extrait raisonné du traité des sensations*) の言葉に耳を傾けよう。「人間精神についての発見は、それが白日の下にさらされるや、あまりに単純なことに思えるので、人は、今まで考えたこともないようなことについて読んでいるにもかかわらず、新たなことは何も学んでいないと信じ込んでしまうのである。」

の文構造に即して述べてみよう。(2A)は、chat(「猫」)という語が適用される対象 a に対して、「a はねずみを捕らない」という条件が満たされる限り、chat という語を適用しない(適用するのをやめる)と宣言している。これはつまり、p (= ねずみを捕まえない猫) に chat が適用されないように chat を定義するということである。これに対して、(2B)は、chat という語が適用される対象 a に対して、仮に「a はねずみを捕らない」という条件が満たされても、chat という語を適用すると宣言している。これはつまり、p (= ねずみを捕まえない猫) に chat が適用されるように chat を定義するということである。ここで、(2A)と(2B)は chat の意味を共有していない。ゆえに、chat の意味を固定し、「p は chat なのか?」と問うこと自体が誤りである¹⁶。

(2A)は「p は chat ではない」と述べ、(2B)は「p は chat である」と述べているが、これらはいずれも事実に基づく判断ではなく、chat という語の用法に関する宣言である。(2A)はねずみを捕る猫と捕らない猫に同じ語を適用することを拒否し、(2B)はそれらに同じ語を適用することを宣言している。何のためにこのような宣言を行うのか。(2A)がねずみを捕る猫と捕らない猫に同じ語を適用することを拒否するのは、それらを異質なものとみなしているからである。(2B)がねずみを捕る猫と捕らない猫に同じ語を適用することを宣言するのは、それらを同質なものであるいは同じものとみなしているからである。意味というものは「どれとどれを同じとみなすか、どれとどれは異質なものとみなすかという、恣意的な選択によって成立する」(山口 2005: 31)。たとえば、a を chat と呼び、b を chat と呼ばないならば、言語使用者は a と b を異なるものとみなしていることになる。逆に、a を chat と呼び、b を chat と呼ぶならば、言語使用者は a と b を同じものとみなしていることになる (cf. Recanati 2004: 9.6)。語の適用のあり方はそれぞれの言語使用者の動機に基づいている。a をかわいがる気にはなるが、b をかわいがる気にならない人は、a と b を異質なものとして扱う動機を持つ。逆に、a と b を等しくかわいがる気になる人は、a と b を同質なものとして扱う動機を持つ¹⁷。対象に対するこうした態度が矛盾文とトートロジーに反映されているのである。この点で、トートロジー X is X が事実命題ではなく X に対する態度を表すという Wierzbicka (1987) の主張は的を射ていたと言える¹⁸。

¹⁶ (1)も同様である。p(殺人が起きた家)が maison に含まれないように maison を定義しようとする相手に対して、(1)は p が maison に含まれるように maison を定義している。ここで、両者は maison の意味を共有していない。したがって、ここにおいて maison の意味を固定し、「p は maison なのか?」と問うこと自体が誤りである。

¹⁷ この点については、さらに山口 (2005) の次の発言を参照。

「知覚世界において反復的に出現すると見なされたものこそが『意味』である。意味とは一般性なのである。」(山口 2005: 116)

「[...]同じ種類の個体が反復的に出現するように思えるときに、それらは同じ名前と呼ばれることになるだろう。このとき、名前と呼ばれるべきものとは、本来は個別的で一回的なものであるはずの知覚的世界の中に現れた、反復的に出現する単位である[...]」(ibid.: 114)

「意味とは、本来は一つ一つ異なるいくつかのものをひとまとめにし、『同じもの』と見なすことによって成立するのがソシュールの根本的な洞察であった。知覚とは個別性であり、意味とは一般性なのである。」(ibid.: 111)

¹⁸ ただし、この考え方に基づいて Wierzbicka (1987) が提案する分析(いわゆるラディカル意味論)は受け入れがたいものである。これについては機会を改めて論じる。また、(i)のトートロジーは俳優への役の割当に関する事実命題を表している (Sakai 2005)。

(i) Dans ce film, Hitchcock est Hitchcock. (「この映画ではヒッチコックはヒッチコックだ。」)

語 X が適用されたものに再び語 X が適用されるというトートロジーに関する最低限の事実からは「トートロジーは常に事実命題を表す」ということも「トートロジーは決して事実命題を表さない」ということも出てこないことに注意する必要がある。トートロジーに限らず、言語表現の機能を思いつきで一つに決めつけるよう

藤田と坂原の分析では、矛盾文とは p を X から追放する発話であり、トートロジーとは p を X に引き戻す発話である。このとき、カテゴリー X がまず存在し、その境界を p が行ったり来たりするイメージを思い浮かべてはならない。 p を含まないようなカテゴリー $X1$ が矛盾文の発話によってはじめて定義され、 p を含むようなカテゴリー $X2$ がトートロジーの発話によってはじめて定義されるのである¹⁹。

6. 4 無関心を表すトートロジー

6.3 節で述べたように、トートロジー X ÊTRE X の発話に伴う最低限の事実は、語 X が適用されたものに再び語 X が適用されることであり、語 X の一度目の適用状況 $S1$ と二度目の適用状況 $S2$ に関して、少なくとも (i) $S1$ と $S2$ とで X の適用対象の属性が異なる、(ii) $S1$ と $S2$ とで X の適用者が異なる、という二つの場合がある。(i)の場合については前節で論じた。(ii)の場合に相当するのが、5.1 節で触れた X の内的差異への無関心を表す用法である。

(14a)に即して述べてみよう。(14a)は「steak という語が適用される対象に steak という語を適用する」と宣言している。最初の適用を行うのは(14a)の話者以外の任意の人である。すなわち、(14a)は「人が steak と呼ぶものを steak と呼ぶ」と宣言していることになる。人が a を steak と呼ぶなら、 a は steak であり、人が b を steak と呼ぶなら、 b は steak である。こうして、(14a)の話者は、一度も a と b を見たことがなくても、 a と b を同じものとして扱う構えを見せていることになる。steak とは、誰かがそう呼んだら即座に成立してしまうような概念なのである。見てもいないのに steak と呼ばれる限りどれも同じとみなす。これが X の内的差異に関する全面的な無関心の源泉にほかならない。

7. 結論

藤田と坂原は、矛盾文 X n'est pas X とトートロジー X ÊTRE X が、 X の意味自体は共有した上で、 X のプロトタイプのあり方をめぐって対立していると考えた。それによると、矛盾文は X のプロトタイプと非プロトタイプを差異化し、トートロジーはそれらを等質化する。しかし、この考え方はパラドックスに陥る。

等質化概念をめぐる混乱は話者間で語の意味が常に共有されているという幻想から生じる。矛盾文やトートロジーはまさしく語 X の意味を提案する発話である。山口 (2005) は言う。

なことがあってはならない。

¹⁹ トートロジーによってはじめて X が定義されるという本論文の主張に対して、トートロジーの発話以前にも X が使われているのではないか、という反論が出されるかもしれない。この反論は、「語 X が適用されたものに再び語 X が適用される」というトートロジーに関する最低限の事実において、そもそも X の最初の適用はいかなる基準によってなされているのか、と問い換えられる。この反論に対しては、ほとんどの場合、語の適用は定義なしに行われている、と答えることができる。フランス語話者は chat という語を定義してから用いているのではなく、なぜかは分からないがある種の対象に対して盲目的に chat という語を適用する習慣を身につけているのである (cf. Wittgenstein 1953: §198-199, §219, §242)。こうした盲目的な言語習慣にメスを入れ、新たな動機のもとに、語に新たな定義を与えようとするのが矛盾文であり、トートロジーである。この点で、矛盾文とトートロジーは、まったく新しい語を定義する数学や化学の教科書における定義文とは異なっている。また、これこそが、矛盾文とトートロジーが一見したところ事実命題を表すように見える理由でもある。

我々は知覚的世界に対してさまざまな動機を持って行動し、知覚的世界からさまざまな意味を取り出してくる。もし同じ動機を持って世界に接するならば、同じようなことが気づかれ、同じような分類がなされるであろうが、我々が自由であり、動機は恣意的でありうるということから、我々が取り出す意味はさまざまでありうる。ソシュールの理論が言わんとする『恣意性』とはこのことであると、私は解釈している。(山口 2005: 101-102)

これによると、「猫」のような基本語でさえ、使用者の動機によってその意味を変える可能性を秘めていることになる。矛盾文やトートロジーは我々の自由と言語記号の恣意性を前提として成立する発話である。もしも、動機の自由がなく、決まった範囲の概念の伝達しか行われぬ言語共同体があったとしたら、おそらくその共同体には矛盾文もトートロジーも存在しないと予想される。

我々には、ある種の猫に対して猫という語を適用することをやめる自由がある。その言語行為が他者に受け入れてもらえるかどうかは分からない。しかし、ある種の猫に対して猫という語の適用をやめ、それまでの日本語と微妙に異なる言語の使用を始めることが権利上は常に可能である。そしてもちろん、それに反対することも、権利上は常に可能である。これは、たとえば天文学者が冥王星に「惑星」という語を適用するのをやめ、言語学者が受動態に「変形」という語を適用するのをやめたことと変わるところがない。そして、それらの動きに反対する人たちがいたことと変わるところがない。我々は固定した意味の中でのみ生きているのではなく、意味の設定を行う自由を有している。それが、日常生活だけでなく、科学的な営みをも可能にしてくれる。意味の設定の自由のないところに、科学は存在し得ない。そして、山口 (2005) が強調するように、それこそがソシュールの言う「言語記号の恣意性」が真に意味していることにほかならない。

付記

本研究は科学研究費補助金(若手研究(B)、研究代表者:酒井智宏、課題番号:22720149「意味排除主義と自然言語の規範性に関する研究」)の助成を受けている。

参考文献

- Cadiot, Pierre & François Nemo (1997) Analytique des doubles caractérisations. *Sémiotiques* 13 : 123-143.
- 藤田 知子 (1988) 「Une femme est une femme —X ÊTRE X 構文解釈の試み」『フランス語学研究』(日本フランス語学会) 22: 15-34.
- 藤田 知子 (1990) 「X ÊTRE X 構文再考」『神田外語大学紀要』2: 115-133.
- 藤田 知子 (1992) 「X ÊTRE X 型構文、第三考—プロトタイプ理論と総称文—」『神田外語大学

- 紀要』5: 91-109.
- 西山 佑司・峯島 宏次 (2006) 「叙述名詞句と語用論解釈—自由拡充プロセスにたいする意味論的制約をめぐって—」 飯田隆 (編) 『西洋精神史における言語と言語観—継承と創造—』: 21-50. 東京: 慶應義塾大学出版会.
- Recanati, François (2004) *Literal meaning*. Cambridge: Cambridge University Press. (今井邦彦 (訳) (2006) 『ことばの意味とは何か—字義主義からコンテキスト主義へ』 東京: 新曜社).
- 坂原 茂 (1992) 「トートロジーについて」 『外国語科研究紀要』 (東京大学教養学部) 40-2: 57-83.
- 坂原 茂 (2002) 「トートロジーとカテゴリ化のダイナミズム」 大堀壽夫 (編) 『シリーズ言語科学 3 認知言語学II: カテゴリ化』: 105-134. 東京: 東京大学出版会.
- Sakahara, Shigeru (2008) Dynamism of category reorganization in tautology. *Language across cultures* (NCKU FLLD Monograph Series Vol. 1): 205-221.
- Sakai, Tomohiro (2005) On tautologies of the type *Hitchcock is Hitchcock* in Japanese. 『KLS Proceedings』 25: 359-369.
- Sakai, Tomohiro (2007) Le schéma interprétatif des énoncés contradictoires du type *X n'est pas X* en français. 『言語情報科学』 5: 79-93.
- Wierzbicka, Anna (1987) Boys will be boys: 'Radical Semantics' vs 'Radical Pragmatics'. *Language* 63: 95-114.
- Wittgenstein, Ludwig (1953) *Philosophical investigations*. Oxford: Basil Blackwell.
- 山口 裕之 (2005) 『人間科学の哲学: 自由と創造性はどこへいくのか』 東京: 勁草書房.

Toward the Dissolution of Confusion over the Notion of Homogenization in Tautology: The Illusion of Shared Meaning

Sakai Tomohiro

Keywords: tautology, homogenization, sharing of meaning, arbitrariness of the sign

Abstract

The homogenization-based approach to the tautology of the form *X is X (even if P)* contradicts itself regarding whether “X with P”, evoked prior to its utterance, falls within the category of X or not. This paradox can be dissolved if we do not consider the meaning of the word *X* to be shared between speakers when *X is X* is uttered. This type of sentence does not express a factual proposition but a grammatical proposition about the very definition of *X*. Such freedom of definition is, we argue, what the arbitrariness of the sign is all about.

(さかい・ともひろ 跡見学園女子大学)